論　文

メンタル・アカウンティングとファンジビリティ

大薗　陽子

Mental Accounting and Fungibility

☼要　旨☼

This essay aims at clarifying the relationship between mental accounting and fungibility through a questionnaire survey. It has two characteristics: i) the subjects were Japanese university students, and ii) the reasons for their choices regarding mental accounting were investigated in detail. The main conclusion can be summarized as follows: 1) results that we obtained are different from what Tversky and Kahneman (1981) proposed, and 2) we found that if students' grades rise, they have a tendency not to choose what is assumed to be mental accounting.

キーワード：メンタル・アカウンティング、ファンジビリティ、サンクコスト

1．はじめに（問題意識）

本稿の目的は、メンタル・アカウンティングで想定される選択に関する学生の意識を分析することにある。Thaler（1999）によると、メンタル・アカウンティングとは、個人や家計において、金銭的な行動を整理、評価、記録するために行う認知的操作のことであり、金銭的な行動の割り当てを特定の心の勘定口座に計上するものである。このような心の勘定口座への計上は、ファンジビリティ[1]（代替可能性）の経済原則に違反すると述べている。

ファンジビリティとは、お金には何の色もついておらず（つまり匿名であるということ）、資産を構成するあらゆる要素は、その外観や形態は消去され中身だけが抽出されて一つの数字で表されるということを意味する（Thaler（1992））[2]。標準的経済学で仮定されている合理的経済人ならば、ファンジビリティで金銭的な行動の割り当てを行うと想定されているが、メンタル・アカウンティングによって、例外的な行動をとることが指摘されている[3]。

メンタル・アカウンティングに関して、Tversky and Kahneman（1981）による次の例がよく挙げられている。

質問8	チケットが10ドルの劇を観ようと思ったと想像してください。劇場に入って、10ドル札を失くしていたことに気づきました。まだ、10ドル出して当日券を買いますか？ はい　88％　／　いいえ　12％
質問9	チケットが10ドルの劇を観ようと思い、チケットを事前に買ったと想像してください。 劇場に入って、前売券を失くしていたことに気づきました。また、10ドル出して当日券を買いますか？ はい　46％　／　いいえ　54％

表1　先行研究のまとめ

Tversky and Kahneman（1981）			川西（2010）		
スタンフォード大学とブリティシュコロンビア大学の学生対象に行った授業	買う	買わない	社会人を対象に行った行動経済学の授業（N=60）	観る	やめる
質問8　チケットが10ドルの劇を観ようと思ったと想像してください。劇場に入って、10ドル札を失くしていたことに気づいた。まだ、10ドル出してチケットを買うか？（N=183）	88%	12%	問題B　あなたは12000円の当日券を買ってコンサート（全席自由）を観るつもりである。会場に到着して当日券を買おうとすると、10000円をなくしてしまったことに気がついた。どうやら盗られたか落としてしまったらしい。さて、あなたならそのまま当日券を買ってコンサートを観ますか、それともやめますか。	65%	35%
質問9　チケットが10ドルの劇を観ようと思い、チケットを事前に買ったと想像してください。劇場に入って、チケットを失くしていたことに気づいた。また、10ドル出してチケットを買うか？（N=200）	46%	54%	問題A　あなたはコンサート（全席自由）の前売り券を10000円で購入した。会場に到着して入場しようとすると入場券がない。どこかに落としてしまったようだ。もはや、取りに帰る時間もなく、払い戻しはできない。12000円の当日券はまだ販売されている。あなたなら、当日券を買ってコンサートを観ますか、それともやめますか。	43%	57%

Tversky and Kahneman（1981）では、「はい」と回答したのは、質問8では88％、質問9では46％であった。質問8では10ドル札の紛失、質問9では10ドルの前売券の紛失であるが、際立った回答の違いが生じた理由として、メンタル・アカウンティング（心理会計）が行われたことによると説明している[4]。質問9のような10ドルの前売券の紛失は、追加的に新たな10ドルの支出となり、心の勘定科目で合計20ドルの支出は多すぎると考えたと思われる。その一方で、質問8のように、10ドル札をなくしたことは、特に当日券購入との関連がなく、心の勘定科目に影響を与えないから、当日券を買おうと考えたのではないかと述べている。

本論文の目的は、メンタル・アカウンティングについて、日本の大学生に対するアンケート調査を用いて検討することである。本アンケート調査の特徴の一つは、調査対象が日本の大学生であること、もう一つは、メンタル・アカウンティングに関する選択理由を詳細に調査したことにある。

メンタル・アカウンティングに関する先行研究（第2節で後述）は、海外の研究についてはいくつか見られるが、我が国において、メンタル・アカウンティングに関する日本の学生の選択を詳細に検討した文献は現時点では限られていると思われる。

したがって、Tversky and Kahneman（1981）のスタンフォード大学とブリティシュコロンビア大学の学生のアンケート調査と比較して、日本の学生に着目して実証研究を行うことは非常に意義のあることであると考えられる。

本稿の内容を概観すると以下のようになる。まず、第2節で先行研究を概観するとともに研究課題を設定する。そして、第3節ではデータの紹介を行い、データ集計による考察をした後に分析方法を提示する。次に、第4節で回帰分析を行い、推計結果を検討したのち、選択理由について詳細に考察する。最後に第5節において本稿から得られた知見について考察し、今後の課題について述べる。

2．先行研究と研究課題

まず、メンタル・アカウンティングに関する学生の意識を分析する前提として、メンタル・アカウンティングに関する先行研究に触れることとする。メンタル・アカウンティングに関しては、Thaler（1985）、Thaler（1990）、Thaler（1992）、Thaler（1999）などが挙げられる。我が国でメンタル・アカウンティングについて研究した文献として、中国農村部におけるメンタル・アカウンティングの内部構成について調査した王（2009）や、fNIRS（近赤外光イメージング）を用いたニューロエコノミクス的模擬投資実験を行った藤森（2012）が存在する。

第1節でメンタル・アカウンティングに関する設問として、Tversky and Kahneman（1981）に触れたが、これに関連した先行研究として、川西（2010）[5]が存在する（表1参照）。

川西（2010）は、表1の結果について、どのようなコンサートを想像するかが回答に影響し、魅力的なコンサートを想像していれば、どちらも「観る」と回答し、魅力的でないコンサートを想像すればどちらも「やめる」と回答するだろう。しかし、あまり極端な想像をしない人たちの多くは、問題Bでは「観る」、問題Aでは「やめる」と回答する。逆に問題Bで「やめる」、問題Aで「観る」と答えるパターンは非常に少ないことがわかっていると述べている。このように、各自の想像したその時の気持ちによって、選択が影響されることも考えられる。

これらの先行研究からは、現金をなくした場合と前売券をなくした場合では、前売券をなくした場合に当日券の購入を嫌う傾向にある可能性が推測される。本稿では、以下のように2つの研究課題の設定を行いたい。

第1の研究課題として、Tversky and Kahneman（1981）のスタンフォード大学とブリティシュコロンビア大学の学生のアンケート調査と日本の大学生に対するアンケート調査を比較検討したい。

第2の研究課題として、日本の学生のメンタル・アカウンティングによる選択を詳細に検討したい。より詳細に検討することで、メンタル・アカウンティングを行う思考のプロセスを考察することが可能になると考えられる。

3．データと分析方法

3．1　データ

実証分析で使用するデータは、2012年11月29日にA大学の116人の大学生に対してアンケートを行った。A大学は、創立約50年の大学であり、文系と理系の学部を合わせると5つを擁する中堅大学である。アンケート調査は、3つの講義の授業中に、経済学部の学生55人と非経済学部の学生61人に対して行われた。調査は、1件欠損値が存在するため、有効回収数は115人となった。

3．2　データの属性

まず、メンタル・アカウンティングに関する推計を行う前提として、個人属性を示したい（表2）。

表2　データの属性

	（%）	サンプル数
男性	84.5	98
女性	15.5	18
2年	13.8	16
3年	69.8	81
4年	16.4	19
自宅	57.4	66
自宅外	42.6	49
アルバイトしている	73.3	85
アルバイトしていない	26.7	31
過去1年以内に観劇した	12.1	14
過去1年以内に観劇していない	87.9	102
月3万以上自由に使える	76.7	89
月3万以上自由に使えない	23.3	27
経済学部	47.4	55
非経済学部	52.6	61

このデータの特徴をまとめると、男女比が約85：15となっており、女性が少ない。学年は、3年生が8割存在する。アルバイトを約7割が行っており、過去1年以内に1回以上、観劇に行っていない者が約9割となっている。そして、自由に使えるお金が月3万円以上ある者が約8割である。経済学部の学生は、約半数である。

3．3　データ集計

それでは、メンタル・アカウンティングに関する2つの質問である、問8と問10の回答のデータ集計を、先行研究と比較して表3に示した[6]。

先行研究のTversky and Kahneman（1981）と川西（2010）では、現金をなくした場合は、当日券を「買う」人の割合が、「買わない」人より高く、前売券をなくした場合は、当日券を「買う」人の割合が「買わない」人より低い。しかし、本稿のアンケートでは、現金をなくした場合は、当日券を「買う」人の割合が、「買わない」人より高いのは先行研究と同様であるが、前売券をなくした場合は、当日券を「買う」人の割合が「買わない」人より高いというように、先行研究とは逆の結果となっている。

このような結果になったのは、前売券と当日券に対して価値観が違うことや、観劇の習慣の有無による事情などが考えられる。

次に、表4で示したように、問8と問10の回答の組み合わせ、＜A＞【（1）買う＋（2）買う】、＜B＞

表3　データ集計（先行研究との比較）

	本稿		Tversky and Kahneman（1981）		川西（2010）	
	買う	買わない	買う	買わない	観る	やめる
問題8　5000円の当日券を劇場で買おうと思い、劇場に入ったところで、5000円札をなくしていることに気づきました。5000円出して、当日券を買いますか？	54%	46%	88%	12%	65%	35%
問題10　5000円の前売券を買って、劇場に入ったところで、前売券をなくしていることに気づきました。5000円出して、当日券を買いますか？	63%	37%	46%	54%	43%	57%

（注）Tversky and Kahneman（1981）の設問である1981年時点での10ドルは、当時の為替レートで換算するとUSドル/円の為替レート（年間の平均価格）2200円となる。総務省統計局HPの「消費者物価指数年報」から、消費者物価指数（東京都区部）を計算すると、1758.5（1981年）÷1428.7（2011年）＝1.23倍となる。すなわち、2200円×1.23倍は、2706円であるが、本稿の設問において、現金をなくす際に千円札を3枚なくすというのは非現実的な設定であろうと考え、本稿では5000円と設定した。

表4　データ集計（本稿での選択類型）

＜A＞【問8：(1)買う＋問10：(2)買う】	43%	→	＜E＞【ファンジビリティパターン＜A＞+＜D＞】 69%
＜B＞【問8：(1)買う＋問10：(2)買わない】	11%		
＜C＞【問8：(1)買わない＋問10：(2)買う】	20%		
＜D＞【問8：(1)買わない＋問10：(2)買わない】	26%	↗	

【（1）買う＋（2）買わない】、＜C＞【（1）買わない＋（2）買う】、＜D＞【（1）買わない＋（2）買わない】のデータ集計を行った。＜E＞【ファンジビリティパターン＜A＞＋＜D＞】に該当する変数を作成し、現金をなくした場合と前売券をなくした場合の当日券の購入にあたって、選択が一貫しているという所謂、標準的経済学で仮定されているファンジビリティと一致する選択をする者を、ファンジビリティパターンと呼ぶこととした。データ集計を行った結果、＜A＞【（1）買う＋（2）買う】（43％）と＜D＞【（1）買わない＋（2）買わない】（26％）を足すと、＜E＞【ファンジビリティパターン＜A＞＋＜D＞】（69％）であった。

この場合、約7割が金銭的行動に対する選択が一貫しているというファンジビリティと一致する選択をする者であった。ここで着目すべきは、先行研究のTversky and Kahneman（1981）と川西（2010）の結果と同じ選択をしたものは、本稿では1割しか存在しなかったことである。これは、Tversky and Kahneman（1981）の想定するメンタル・アカウンティングをしていない者が本稿においては、9割存在するということになり、興味深い結果と言えよう。

3．4　分析方法

本稿では、メンタル・アカウンティングに関する大学生の選択に着目して回帰分析を行う。被説明変数として用いるのは、表3にも掲載したメンタル・アカウンティングに関する2つの質問であり、詳細は、表5の変数定義に記述している。

説明変数には、以下の「女性ダミー」、「学年」、「自宅ダミー」、「アルバイトダミー」、「過去1年以内の観劇経験ダミー」、「自由に使えるお金が月3万円以上ダミー」、「経済学部ダミー」を使用する。導入した各変数の詳細な定義は表5に表している。

推計方法は、Probit Model（プロビットモデル）を採用し、推計1は、【（1）5000円札をなくして、当日券買うダミー】と【（2）5000円の前売券をなくして、当日券買うダミー】、推計2は、＜A＞【（1）買う＋（2）買う】、＜B＞【（1）買う＋（2）買わない】、＜C＞【（1）買わない＋（2）買う】、＜D＞【（1）買わない＋（2）買わない】、推計3は、＜E＞【ファンジビリティパターン＜A＞＋＜D＞】を被説明変数に使用して、分析を行った。基本統計量は表6に表した。

表5　変数定義

＜被説明変数＞　≪メンタル・アカウンティング≫

【(1)5000円札をなくして、当日券買うダミー】：1=買う、0=買わない
【(2)5000円の前売券をなくして、当日券買うダミー】：1=買う、0=買わない
＜A＞【(1)買う＋(2)買う】：1=該当、0=非該当
＜B＞【(1)買う＋(2)買わない】：1=該当、0=非該当
＜C＞【(1)買わない＋(2)買う】：1=該当、0=非該当
＜D＞【(1)買わない＋(2)買わない】：1=該当、0=非該当
＜E＞【ファンジビリティパターン＜A＞＋＜D＞】：1=該当、0=非該当

＜説明変数＞
≪個人属性等≫
【女性ダミー】：1=女性、0=男性
【学年】：1=2年、2=3年、3=4年
【自宅ダミー】：1=自宅、0=自宅外
【アルバイトダミー】：1=している、0=していない
【過去1年以内の観劇経験ダミー】：1=あり、2=なし
【自由に使えるお金が月3万円以上ダミー】：1=あり、2=なし
【経済学部ダミー】：1=該当、0=非該当

表6　基本統計量　　N＝115

変数	平均	標準偏差	最小値	最大値
被説明変数：【(1)5000円札をなくして、当日券買うダミー】	0.5478	0.4999	0	1
女性ダミー	0.1565	0.3649	0	1
学年	3.0174	0.5458	2	4
自宅ダミー	0.5739	0.4967	0	1
アルバイトダミー	0.7304	0.4457	0	1
過去1年以内の観劇経験ダミー	0.1217	0.3284	0	1
自由に使えるお金が月3万円以上ダミー	0.7652	0.4257	0	1
経済学部ダミー	0.4783	0.5017	0	1

表7　推計結果1

被説明変数：【(1)5000円札をなくして、当日券買うダミー】			【(2)5000円の前売券をなくして、当日券買うダミー】	
説明変数	限界効果	標準誤差	限界効果	標準誤差
女性ダミー	0.0106	0.1408	−0.1933	0.1427
学年	0.1158	0.0921	−0.0463	0.0897
自宅	−0.0361	0.1031	−0.0247	0.0991
アルバイトダミー	0.1429	0.1160	0.2410	0.1166 **
観劇ダミー	0.1533	0.1412	0.0546	0.1363
3万以上ダミー	−0.0317	0.1184	−0.2106	0.1024 *
経済学部ダミー	−0.2044	0.0953 **	−0.0591	0.0953
Log likelihood	−74.5928		−70.1393	
サンプル数	115			

（注1）***は1%、**は5%、*は10%水準で統計的に有意であることを示す。

4．結果

4．1　推計結果1

【(1) 5000円札をなくして、当日券買うダミー】と【(2) 5000円の前売券をなくして、当日券買うダミー】の2つを被説明変数とした全体の推計結果が表7である。

【(1) 5000円札をなくして、当日券買うダミー】においては、経済学部ダミーが5％水準で有意に負の影響を与えていた。先行研究のMarwell and Ames（1981）、Carter and Irons（1991）、Frank et al.（1993）では、非経済学専攻の学生と比較して、経済学専攻の学生が利己的な傾向があると示しており、本項の推計結果において、経済学部の学生が利己的であるという先行研究とは少し異なるが、経済学部の学生は現金をなくした場合、当日券を買わない傾向にあると言える[7]。

【(2) 5000円の前売券をなくして、当日券買うダミー】においては、アルバイトダミーが5％水準で有意に正の影響を与えていた。これは、アルバイトをしている学生は、前売券をなくした場合、当日券を買う傾向にあると言える。アルバイトをしていることで予算制約が少なくなり、前売券の購入に関して抵抗が少なくなる可能性が考えられる。

次項では、現金をなくした場合に当日券を「買う」「買わない」、前売券をなくした場合に当日券を「買う」「買わない」という選択の類型を4つに分けて推計を行いたい。

4．2　推計結果2

選択の類型を＜A＞【(1) 買う＋(2) 買う】、＜B＞【(1) 買う＋(2) 買わない】、＜C＞【(1) 買わない＋(2) 買う】、＜D＞【(1) 買わない＋(2) 買わない】の4つに分けて、推計した結果が表8である。

表8で、注目すべきは、被説明変数＜A＞【(1) 買う＋(2) 買う】に対して、経済学部ダミーが5％水準で有意に負の影響を与えていたことである。前項でも触れたが、本項の推計結果において、経済学部の学生が利己的であるという先行研究とは異なるが、経済学部の学生は現金や前売券をなくした場合、当日券を買わない傾向にあると言える。

被説明変数＜C＞【(1) 買わない＋(2) 買う】に対して、学年が5％水準で有意に負の影響を与えていた。これは学年が高いほど、当日券を【(1) 買わない＋(2) 買う】傾向を示さないということになる。

被説明変数＜D＞【(1) 買わない＋(2) 買わない】に対して、アルバイトダミーが5％水準で有意に負の影響を与えていた。これは、アルバイトをしていることで、【(1) 買わない＋(2) 買わない】傾向を示さないということである。アルバイトをしていることで、現金をなくしたり、前売券をなくしても当日券の購入に関して、抵抗が少なくなる可能性が考えられる。

表8　推計結果2

被説明変数：＜A＞【(1)買う＋(2)買う】			＜B＞【(1)買う＋(2)買わない】	
説明変数	限界効果	標準誤差	限界効果	標準誤差
女性ダミー	−0.0465	0.1394	0.0468	0.0943
学年	0.1396	0.0912	−0.0234	0.0564
自宅	−0.0591	0.1023	0.0271	0.0609
アルバイトダミー	0.1282	0.1128	0.0111	0.0722
観劇ダミー	0.0423	0.1534	0.0892	0.1085
3万以上ダミー	−0.0801	0.1212	0.0513	0.0667
経済学部ダミー	−0.2057	0.0946 **	−0.0032	0.0596
Log likelihood	−74.0478		−39.2387	
サンプル数	115			

被説明変数：＜C＞【(1)買わない＋(2)買う】			＜D＞【(1)買わない＋(2)買わない】	
説明変数	限界効果	標準誤差	限界効果	標準誤差
女性ダミー	−0.1408	0.0694	0.1426	0.1394
学年	−0.1813	0.0730 **	0.0710	0.0802
自宅	0.0417	0.0765	0.0065	0.0886
アルバイトダミー	0.0818	0.0765	−0.2578	0.1116 **
観劇ダミー	0.0211	0.1199	−0.1497	0.0941
3万以上ダミー	−0.1385	0.1034	0.1464	0.0848
経済学部ダミー	0.1295	0.0758 *	0.0561	0.0843
Log likelihood	−51.1611		−58.5628	
サンプル数	115			

（注1）　***は1％、**は5％、*は10％水準で統計的に有意であることを示す。

4．3　推計結果3

前述表4で触れたが、金銭的な行動の選択が一貫する者を、＜E＞【ファンジビリティパターン＜A＞＋＜D＞】として、推計した結果が表9である。

被説明変数、＜E＞【ファンジビリティパターン＜A＞＋＜D＞】に対して、学年が5％水準で有意に正の影響を与えていた。これは、学年が高いほど、現金をなくした場合、前売券をなくした場合の当日券の購入に関して、「買う」という態度、「買わない」という態度が一致する傾向があるということである。

4．4　選択理由の詳細検討

本論文末付録として、付録Aにアンケート調査の質問の全部を掲載した。その中で問9と問11に記述された選択理由の詳細をまとめたものが、付録B、付録C、付録D、付録E、付録Fである。

＜A＞【(1) 買う＋(2) 買う】理由の詳細を付録B（その1）と付録C（その2）として記述したものを概観すると、「せっかく来たのだから観るため、現金をなくしたり、前売券をなくしても当日券を購入する」という理由が多く見られた。当日券のコストそのものよりもせっかくその場所に来たのだからという、劇場に来たことに費したサンクコスト（埋没費用）（Thaler (1980) 参照）を重要視していると言えよう。

付録D　＜B＞【(1) 買う＋(2) 買わない】理由の詳細を概観すると、Tversky and Kahneman（1981）の想定するメンタル・アカウンティングである、「前売券の紛失は、追加的に新たな5000円の支出となり、心の勘定科目で合計1万円の支出は多すぎると考えた」に一致する理由が多い。

付録E　＜C＞【(1) 買わない＋(2) 買う】理由の詳細を概観すると、現金を失くした場合、「買わない」理由として、現金をなくしたショックを挙げ、前売券をなくした場合は、「買う」理由として、前売券を事前に購入するほど、観たかったものだからという理由が多い。これは、メンタル・アカウンティングというよりも、現金と前売券によって、それぞれのフレーミングを各自が行っている可能性が高いと思われる。日本においては、前売券の方が当日券より安いということがあり、そのあたりの事情が影響したことが考えられる。

付録F　＜D＞【(1) 買わない＋(2) 買わない】

表9　推計結果3

被説明変数：＜E＞【ファンジビリティパターン＜A＞＋＜D＞】		
説明変数	限界効果	標準誤差
女性ダミー	0.1082	0.1133
学年	0.2076	0.0886 **
自宅	−0.0696	0.0935
アルバイトダミー	−0.1128	0.0993
観劇ダミー	−0.1112	0.1480
3万以上ダミー	0.0873	0.1155
経済学部ダミー	−0.1349	0.0905
Log likelihood	−66.2372	
サンプル数	115	

（注1）　***は1％、**は5％、*は10％水準で統計的に有意であることを示す。

理由の詳細を概観すると、「もったいない」という当日券のコストそのものを意識している理由が多い。

これまでの分析結果から、第2節で設定した2つの研究課題を考察していきたい。

第1の研究課題として、Tversky and Kahneman（1981）のスタンフォード大学とブリティシュコロンビア大学の学生と、本稿の日本の大学生に対するアンケートを比較検討した結果、現金をなくした場合は、当日券を「買う」人の割合が「買わない」人より高いのは先行研究と同様であるが、前売券をなくした場合は、当日券を「買う」人の割合が「買わない」人より高いというように、先行研究とは逆の結果となっていた。

第2の研究課題として、日本の学生のメンタル・アカウンティングによる選択を詳細に検討した結果、「せっかく来たのだから観劇するため、現金をなくしたり、前売券をなくしても当日券を購入する」という理由が散見され、劇場に来るために費やしたサンクコストを重要視していた。現金をなくしても「買わず」、前売券をなくしても「買わない」選択をする理由の詳細を概観すると、「もったいない」というコストそのものを意識する理由が多く挙げられていた。

第1、第2の研究課題を検討した結果から、Tversky and Kahneman（1981）の想定する、「前売券の紛失は、追加的に新たな5000円の支出となり、心の勘定科目で合計1万円の支出は多すぎると考えた」に一致する理由を挙げる者もいたが、全体の1割に過ぎなかった。このことは、第1節で触れた、Tversky and Kahneman（1981）の想定するメンタル・アカウンティングとは異なった選択をしていたことになる。川西（2010）は、この点、どのようなコンサートを想像するかが回答に影響するとし、魅力的なコンサートを想像していれば、現金をなくしても、前売券をなくしてもどちらも「観る」と回答し、魅力的でないコンサートを想像すればどちらも「やめる」と回答するだろうと指摘している。本稿での結果も、質問に対する想像の幅が個人によってそれぞれに異なっており、魅力的なコンサートを想像しているかどうかで選択が分かれた可能性が考えられる。

Thaler（1999）は、Kahneman and Tversky（1984）（Tversky and Kahneman（1981）と同じ実験）を評して、前売券と同額の現金を失くした後よりも、前売券を失くした後の方が当日券を買う意思をなくすことに言及し、前売券が心の勘定口座に含まれるため、追加的に当日券を買うことを嫌うが、現金の損失ではそうではないと述べていた。

本稿において、現金をなくしても、前売券をなくしてもどちらも「買う」、または、どちらも「買わない」という一貫した態度をとるという、標準的経済学で仮定されているファンジビリティと一致する選択をする者が7割存在していた。しかし、その理由を詳細に検討すると、ファンジビリティから選択をしているのではなく、コストそのものよりも劇場に来るために費やしたサンクコストを重要視して選択を行っている回答が多数存在していた。

この結果は、前述のThaler（1999）の前売券の紛失は、前売券が心の勘定口座に含まれるため、当日券の購入を嫌うという考察と異なっており、大変興味深いと言えるだろう。

5．おわりに

本稿では、メンタル・アカウンティングに関する選択を類型化し、標準的経済学で仮定されているファンジビリティと一致する選択を行う者をファンジビリティパターンとして、推計を行った。

本稿の貢献は、これまで十分に議論されてこなかったメンタル・アカウンティングに関して、日本の大学生の選択に関して実証分析を行い、Tversky and Kahneman（1981）のスタンフォード大学とブリティシュコロンビア大学の学生対象の先行研究と、本稿の日本の大学生に対するアンケートを比較検討し、メンタル・アカウンティングで想定される選択と整合的ではない結果を元に、詳細に選択理由を検討したことにある。

第2節の先行研究（Tversky and Kahneman（1981）、川西（2010））から、現金を失くしたことは、特に当日券購入との関連がなく、心の勘定科目に影響を与えないから、当日券を買おうと考えるとされているのが、メンタル・アカウンティングであった。しかし、本稿の結果からは、標準的経済学で仮定されているファンジビリティと一致する選択をする者が多く存在していた。さらに、その選択理由が、コストそのものよりも劇場に来るために費やしたサンクコストを重要視するものであった。Thaler（1999）は、前売券の紛失は、前売券が心の勘定口座に含まれるため、当日券の購入を嫌うという考察をしており、本稿の学生たちがメンタル・アカウンティングで想定される選択と異なった選択を行っていたことは、先行研究では明らかにされていなかった点である。

このように、日本の大学生が、メンタル・アカウンティングで想定されている選択とは異なった選択をし、その理由がコストそのものよりも劇場に来るために費やしたサンクコストを重要視していたという知見は、今後のメンタル・アカウンティングに関する研究において、重要な視点を提供できると思われる。

最後に本稿に残された検討課題について触れたい。本稿では、日本の大学生のメンタル・アカウンティングに対して影響を与えている要因とその選択理由に注目して検討を行った。メンタル・アカウンティングと言っても規定要因はさまざまに考えられるため、ごく一部分について考察しているに過ぎないと言える。本稿のデータは、日本の大学生にアンケート調査を行ったが、大竹・筒井（2012）が指摘するように、大学生のサンプルは、年齢が20歳前後に集中している上に、独立して生計を立てていないケースが多く、一般の人々を代表した被験者（本稿では回答者）であるかは疑問がある。そのため、より多くの年齢層に関する同様のデータの収集が望まれる。また、一人の回答者に複数の設問パターンを想定して実施したが、異なったサンプルに一つずつ、設問パターンを想定して行い、今回の結果と比較してみることも必要であると思われる。さらに、今回は観劇でデータを収集したが、観劇以外に関する調査も急務である。これらは今後の課題としたい。

【注】

1）開発援助の文脈で、「流用可能性」を意味することもあるが、本稿では、「代替可能性」として使用する。

2）Thaler（1992）の第9章は、Thaler（1990）を翻訳したものである。

3）Thaler（1992）では、経済学においての貯蓄に関する標準モデルは、「ライフサイクル理論」とされるが、ライフサイクル理論の枠組みでのファンジビリティ（代替可能性）は、資産を構成するあらゆる要素は、その外観や形態は消去され中身だけが抽出されて一つの数字で表されると述べている。ライフサイクル理論とは、「どの年においても、現在の収入、純資産、それに将来に期待される収入を合わせ、その人の金融資産の時価を計算し、その資金で設定できる年金水準をはじき出す。そうしてその年金から受け取れるだろう金額に見合うだけを消費するという理論」のことを指す。

4）Tversky and Kahneman（1981）　は、“psychological accounting”、Kahneman and Tversky（1984）では、“mental accounting”として、説明している。なお、Kahneman and Tversky（1984）は、Tversky and Kahneman（1981）の質問8と質問9を入れ替えて、考察しているが、本稿では、初出のTversky and Kahneman（1981）を取り扱うこととする。

5）Tversky and Kahneman（1981）の実験の順番にならい、表2では、問題Aと問題Bを入れ替えて記述する。

6）本論文末付録として、付録Aにアンケート調査の質問の全部（問1～11）を掲載した。

7）但し、Frey and Meier（2003）では、非経済学専攻の学生と比較して、経済学専攻の学生が利己的な傾向があるということに否定的な見解を示している。

【 参考文献 】

Carter, J. R. and M. D. Irons (1991) Are economists different, and if so, why? *Journal of Economic Perspectives*, vol.5, no.2, 171-177.

Frank, R. H., T. Gilovich and D, T. Regan (1993) Does studying economics inhibit cooperation? *Journal of Economic Perspectives*, vol.7, no.2, 159-171.

Frey, B. S. and S. Meier (2003) Are Political Economists Selfish and Indoctrinated? Evidence from a Natural Experiment, *Economic Inquiry*, vol.41, no.3, 448-462.

藤森裕美（2012）「サンクコスト効果と選好の逆転についての一考察：プロスペクト理論とメンタルアカウンティングによる説明」『青山社会科学紀要』41巻、1号、1－21。

Kahneman, D. and A. Tversky (1984) Choices, values, and frames, *American Psychologist*, vol 39, no.4, 341-350.

川西諭（2010）『図解　よくわかる行動経済学－「不合理行動」とのつきあい方』秀和システム。

Marwell, G and R. Ames (1981) Economists free ride, does anyone else? : Experiments on the provision of public goods, IV, *Journal of Public Economics*, vol.15, no.3, 295-310.

王秀紅（2009）「メンタル・アカウンティングの内部構成－中国農村部における調査」『東アジア研究』7号、105－121。

大竹文雄・筒井義郎（2012）「経済実験による危険回避度の特徴の解明」『行動経済学』第5巻、1－18。

総務省統計局「消費者物価指数年報」 http://www.stat.go.jp/data/cpi/

Thaler, R. H. (1980) Towards a positive theory of consumer choice, *Journal of Economic Behavior and Organization*, vol.1, 39-60.

Thaler, R. H. (1985) Mental accounting and consumer choice, *Marketing Science*, vol.4, no.3, 199-214.

Thaler, R. H. (1990) Saving, fungibility and mental accounts, *Journal of Economic Perspectives*, vol.4, 193-205.

Thaler, R. H. (1992) The Winner's Curse: Paradoxes and Anomalies of Economic Life, Princeton University Press, Inc.（篠原勝訳『セイラー教授の行動経済学入門』ダイヤモンド社、2007）.

Thaler, R. H. (1999) Mental accounting matters, *Journal of Behavioral Decision Making*, vol.12, 183-206.

Tversky, A. and D. Kahneman (1981) The framing of decisions and the psychology of choice, *Science*, vol. 211, 453-458.

付録A　アンケート調査の質問の全部

問1　性別をお答えください。
1．　男性
2．　女性

問2　今、何限ですか。
1．　2限
2．　3限
3．　4限

問3　学年をお答えください。
1．　1年
2．　2年
3．　3年
4．　4年

問4　居住形態をお答えください。
1．　自宅
2．　自宅外

問5　アルバイトをしていますか。
1．　はい
2．　いいえ

問6　あなたは観劇に過去1年以内に1回以上行きましたか。
1．　はい
2．　いいえ

問7　あなたは、自由に使えるお金が月3万円以上ありますか。
1．　はい
2．　いいえ

問8　5000円の当日券を劇場で買おうと思い、劇場に入ったところで、5000円札をなくしていることに気づきました。5000円出して、当日券を買いますか？
1．買う
2．買わない

問9　問8の理由を記入してください。

問10　5000円の前売券を買って、劇場に入ったところで、前売券をなくしていることに気づきました。5000円出して、当日券を買いますか？
1．買う
2．買わない

問11　問10の理由を記入してください。

付録B　＜A＞【(1)買う＋(2)買う】理由の詳細（その1）

	(1)買う	(2)買う
1	元々見ようと思って劇場に行ったのなら5000円札をなくしたとしても見ない理由にはならないから。	見たいものは少し高くついても見る価値がある
2	劇場まで来てしまったので、交通費代などがもったいないと思うので買います。	交通費代など他にもお金を払っていてその分がもったいないので買います。
3	どうしても見たい劇場だったから。	どうしても見たい劇場だったから。
4	1万円を出せば5千円札がもらえるかもしれないし、当日券を買わないと劇場を見ることができなくなってしまうため。	劇場まできたからには、もったいないし、悔しいので買う。
5	その劇を見に来たわけだから、なくしてしまっていても当日券を買って観ると思います。	左の問と同じで観ることを目的として来ているから、もったいないなと思いつつ、買ってしまうと思います。
6	5000円札を探すのは後にして、せっかく来たから当日券を買う。	見る気分になっているので、買う。
7	せっかく劇場まで足を運んだため。お金がない、もしくは払いたくないからといって、そのまま帰る選択肢はない。	その劇場にはそれだけの価値がある。
8	この理由で観なかったら、その場に向かっている時間、準備している時間が無駄になるし、自分が観たくても行ったんだから観ると思います。	まだ1回家に帰れる時間があったら取りに行きますが、無理だったら、左の理由と一緒で観ます。でも、劇がその日だけではなかったら前売り券を買って別の日に行くかもしれません。
9	5000円札の思い当たるところを思い出し探してみてなければ購入する。劇場で劇を見るために来たのでそれだけは観たいので残りの所持金で当日券を買う。	左の問と同じく思い当たるところを探してみてなければもう一度購入する。もう劇場に入ってしまったこともあり、買って観る。
10	そこまで来た時間を無駄にしたくないから。また、観たいから来たので、お金を余分に使っても買うと思う。	こちらも左の理由と同じで買ってしまうと思う。
11	本当に前から興味があったので、あれば買います。	劇場に着いてしまっているので、そこまで来たら買います。
12	せっかく劇場まで来たので買います。	前売券を買っているほど観たいものだと思うので買います。
13	その場までせっかく足を運んだのだから、お金を下してでも買うと思います。	左と同じで足を運んでいるし、気持ちは劇を観たいと思っているので、当日券を買うと思います。
14	劇場まで来たことと、自分の好きで観に来ている訳なので、買ってでも観ます。	自分の好きなものを観れるためなら買います。
15	観たくて劇場まで来ているので買います。	前売券を買うほど観たいものだと思うので、前売券をなくしたことを悔やみながら買います。
16	私が劇場に行くとしたら、誰か（知人）が出演しているからなので、5000円出して当日券を買う。	同左
17	5000円という額からしてかなり観たかった劇であろうと想像できるので、買って観るだろうと思います。	左の回答と同じような理由で買うと思います。
18	5000円札をなくしたらからといって、所持金は1万円や5000円といったぎりぎりの金額とは限らないと思うからです。また、5000円を出してまで観ようとしたものの、当日券ならそのぐらいでは諦めないと思うからです。	前売券を買ってまで観ようとしたなら、なくした場合はしかたがなく当日券を買って観ると思います。
19	絶対に観たいと思ったときしか行かないから、5000円が財布にあるならも一度買う。	左と同じ理由。
20	どうしても観賞したい劇であったことに加えてせっかく足を運んだという思いから。	左と同じ理由で当日券を購入することを選びます。
21	お金をなくしたのは仕方ないし、この場所に来た意味がないと思うので、私はもう一度買うと思います。	この時も左と同じことを考えると思います。
22	せっかく劇場まで足を運んだのだから、5000円余計にお金がかかるけど当日券を買う。	劇場にせっかく来たのだから当日券を買う。
23	初めは5000円を探すが、劇場まで来たため、5000円を結論としては買う。	前売券を買ってまで来たので、5000円を出してでも観たいから。
24	劇場に入ってしまったから。	劇場に入ってしまったから。
25	券を買わないと公演が観られないから。	公演を観たいから。

（注）＜A＞【(1)買う＋(2)買う】に該当する者の全員分を原文のまま、掲載している。
但し、「上」という記述は、編集の都合で「左」と著者が変更した。

付録C　＜A＞【(1)買う＋(2)買う】理由の詳細（その2）

	(1)買う	(2)買う
26	せっかくその劇場まで足を運んで行ったので当日券を買う。	左と同じく、当日券でも前売券でもその場所まで行ったので、買う。
27	当日券を買いに来たのに買わなかったら来た意味がなく、時間がもったいないから。	せっかく観に来たのに観ないで買えるともったいないから。
28	観たいと思って、劇場に来ているので買う。	劇場に来ているし、時間がもったいないので5000円出して当日券を買う。
29	少し悩むと思うが劇場を観たくて行ったと思うので、当日券を買う。	一度、前売券を買っているので観ないと損した気持ちになるので当日券を買います。
30	バッグの中に5000円をもしかしたらあるかもしれないし、わざわざ劇を観に来たので、別の5000円札を出して、当日券を買います。	とっても好きな芸能人または、友達と一緒に来ていたら、忘れてしまった自分が悪いんだ･･･と思い当日券を買うと思います。
31	どうしても観たい公演だから。	どうしても観たい公演だから。
32	その時の状況によります。	その時の状況によります。
33	一人なら行かないかもしれないから、せっかく観に来たので何とか行くようにします。	左の理由と同じです。
34	交通費等、劇場以外にもお金をかけてきたのなら、観ていくべきだと思うから。連れがいる場合は、その場の空気を読んで買うべき。	交通費等を考えたら、やっぱり観たいと買うと思う。
35	一人でなく誰かと約束していたと思うからです。もし一人だとしたら、考えてしまうかもしれません。	直前まで劇を観るつもりだったのに買えるのは悲しいからです。
36	せっかく劇場まで足を運んだのだから劇を観なければ逆にもったいないと思ったため。	左記と同様にせっかく劇場に来たのだから、観なければぎゃくにもったいない。
37	もし行くとしたら、一人では私は絶対に行きません。誰かと行くでしょう。その人が私のせいで入れなくなったりしたら迷惑をかけるので、私は買います。	左の問と同じ理由です。
38	劇場に入ってしまった流れで買ってしまう。	劇場までせっかく来たので買う。
39	自分の好きなものを観るために来たのだから買う。	劇場まで交通費も出しているのだからどうしても観る。
40	せっかく劇場まで来たのだから、観ないならばその移動時間がもったいなく思えてしまう。	左とほぼ同じ理由。
41	残りのお金が5000円以上あるのなら買う。劇場にまで行って観たいと思っていたものだと考えるから。	前売券を買ったのはかなり前で今またバイト代などでお金が入っているのでおれば買う余裕があるから。それだけ観たいと思って、前売券を買ったと思われるから。
42	その日は劇を観ると決めたので、観ないで帰るのは嫌だと思ったため。	前売券を買うほど楽しみにしていたのなら、観ない手はないと考えたため。
43	状況、場所にもよるが、今日の日程として組み込んでしまっているため、その日その場所に来た意味がなくなってしまうから。	左記に同じ理由があるが、前売券を買うということは、それほどに楽しみにしていると思うので買います。
44	サイフの中に残り五千円以上入っているのであれば、せっかく劇場まで来ているので買う。	前売券を買ってまで観たいものであり、忘れたのでなく、なくしたのなら買う。
45	お金があるならば買います。	前売券を買っているならせっかくなので買いたいから。
46	そのために行ったのならば、買う。	そのために行ったのならば、買う。考え方は左と同じ。
47	（お金があれば）せっかく来たので買う。	（お金があれば）来てしまったし、せっかくなので買う。
48	感激を楽しみに来たので。せっかく来たのに観ずに帰るのはもったいないと思うので。	まず、前売券をなくしたことをスタッフの方に説明し、名義などで購入したことが確認できないかなど頑張ってみるが、ダメだったら最終的に買います。楽しみにしていたので。
49	せっかくだから観る。ここは攻めで行いく。観たい。これぐらいでは動じない。揺るがない。金に余裕があるように見える。	左の回答を同じ。
50	1万円の劇だと思って5000円を払う。観るために来たのだからもったいない。なくしてしまったのは仕方ない。	左と同じです。

（注）＜A＞【(1)買う＋(2)買う】に該当する者の全員分を原文のまま、掲載している。
但し、「上」という記述は、編集の都合で「左」と著者が変更した。

付録D　＜B＞【(1)買う＋(2)買わない】理由の詳細

	(1)買う	(2)買わない
1	その劇場をどのくらい観たかったかによりますが、私ならせっかく劇場まで来たので、買うと思います。	前売券を購入しているのに当日券を買う気にはならないと思う。
2	劇場に入ってしまったので、帰ってしまうとすべてが無駄になってしまうから。	結果1万円になってしまうから。
3	5000円もの高額な券を買うのですから、相当この劇場に行きたかったと思うので、涙を飲んで買います。	劇場に1万円を出すことは自分に中で悔しいからです。
4	自分のミスなので買います。	とりあえず担当者に話し、ダメな場合は買う。
5	友達と一緒に観に行っていたら買う。一人で観に行っていたら、どれだけその劇が観たかったかの度合いによる。	左と同じく、友達と一緒に観に行ってたら買うが、一人で観に行ってた場合には、一度、家に帰って探してみてから決める。
6	何かを観るために劇場へ来たのだから、5000円払って当日券を買うと思います。無くした5000円札はアクシデントとして諦めます。	この場合、すでに前売券を買うためにお金を自らの意思で払っているため、また5000円出して当日券を買おうとは思いません。
7	五千円札を無くした≠五千円を無くした	探せばあるかもしれないから。一度探してみてそれでも見つからなかったら(どれだけ観たいかにもよるが)買う。
8	その劇場で行われるものを観たくて来ているので、私は当日券を買います。	自分が歩いた道をよく探してなかったら諦めます。
9	最初から当日券を買う予定で劇場に来たから。	当日券は観る場所が後ろになってしまうから。
10	もうすでに劇場へ足を延ばしているし、それほど観たかったはずなので買う。	使っているお金は変わらないが気持ちの持ちようが違うので買わない。
11	所持金に余裕があれば買う。	前売券を無くしてしまったので、諦めて買わない。
12	劇を観に来ているから。	一度券を買ってしまっているから。
13	せっかく観たいと思って劇場まで行ったのだから、お金に余裕があれば買うと思います。	家に帰れば前売券があるのであれば、また日を改めて来ればいいと思うから。

(注) ＜B＞【(1) 買う＋(2)買わない】に該当する者の全員分を原文のまま、掲載している。
但し、「上」という記述は、編集の都合で「左」と著者が変更した。

付録E　＜C＞【(1)買わない＋(2)買う】理由の詳細

	(1)買わない	(2)買う
1	観る気が失せてしまうと思う。お金を無くしたショックで。	前売券を買うほど観たいものだと思ったのだから、無くしてしまったら当日券を買う。
2	劇場に入るより無くした五千円を探しに行く。	前売券を買うくらい観たいので当日券を買ってでも観ると思う。
3	五千円を無くしてショックなのもあり、さらに五千円出してまで観ようとは思わないからです。でもすごく観たかったものなら出すかもしれません。	前売券を買っているということは、前々から見たかったものだと思うので、買うかもしれません。
4	当日券用のお金を用意しておいて無くしてしまったから買わないと思う。	前売券を買ったのは観たいから買ったわけだから失くしても当日券を買うと思う。
5	5000円札を失くしたというショックとまた五千円出すとなると･･･と思うので買わない。	前売券を買ったのはを買うということは自分がとても観たいものであると思うので、5000円をもう一度出しても買う。
6	基本的に行動するときは予算を考えて動いているため、劇場に入る前なら予定を変えると思います。	劇場に入ったということはそれを観ると決めているため、止むを得ない場合は買い直します。
7	観るものによるけれど、さらに5000円払って観るのと同じなのでそれほど観たいものでなければ仕方なく諦める。	事前に前売券を念のために買うくらい好きなものだと思うので、買う。お金の問題ではなく、観たいかどうかの問題だと思う。
8	以前から楽しみにしていたという訳ではないと思うので、この場合は諦めます。	前売券を買うほど楽しみにしていたのであれば、当日券を購入してでも観たいと考えます。
9	5000円札がないので自分は諦めます。	前売券を買ってまでしたので当日券を買います。
10	当日券を使う5000円を失くしてまた5000円を出して買うというのはもったいない気がするので5000円以内で他のことに使う。	前売券を買うことはそれだけ劇を楽しみにしていたと思うので買います。
11	映画を観る気分ではなくなっていると思うから。	前売券を買っていたということは、それだけその映画を心に留めていたということであり、多少の無理はしてもよいと思うから。
12	この劇場で行う公演が最終日であったら買うけれども、上記の状況の場合、5000円札をなくした場合は買いません。	前売券を買ってまでして観たい劇場であるから、当日券であっても5000円を出して買いたいと考えます。
13	5000円を失くしてしまったショックが大きいと思うからです。	前売券を買ってまで観たかったものならば、出費が増えてしまっても仕方がないと思ったからです。
14	5000円札を失くしたことにより、それまで観ようとしていた高まっていた気持ちが冷めてしまうから。	前売券を購入していたため、何が何でも劇場に入って観たいというは変わらないから。
15	5000円を失くした時点での残金にもよるが、失くした5000円をこれから支払う5000円と合わせて10000円になるので購入しないと思います。また、当日券が販売されている公演でもあるので、これから先の公演のチケットが売り切れてはないと思うので、少し時期を経てお金に余裕があれば劇場に行くと思います。	前売券を購入しているということは、自分がそれだけ興味を持っているものであると思うので。追加で5000円支払っても観る価値があると思います。
16	5000円札を失くしたことで、5000円しか消費をしなかったのに、そこで、5000円を出して観ると1万円消費することになるから。	前売券を買っているということは、それを鑑賞したいと思っているから5000円出して当日券を買います。
17	当日にチケットを買うお金を失くしてしまったのだから、さらに五千円を出してしまうと、後日の生活が辛くなってしまうから。	前売券を買うほど観たかったのだと思うので、最初から一万だったと思い込んで買う。
18	失くした5000円を含めて1万円も使ってしまうと生活費がなくなってしまう。	どうしても観たいと思っていたものなら、今、5000円を出してでも観たいと思う。
19	その日に使うお金を決めて持ち歩くようにしているので、万が一失くした場合は諦めます。	前売券の場合は、前日に購入していて当日は当日分のお金を持っているので、購入します。
20	5000円札を失くしたら買わない。	前売券を失くしても買うと思いました。
21	当日券ではなくて当日券を先に買っておくため。	当日券を買わないと劇が観られなくなるため。
22	劇場で払う予定だった5000円をすでに失ってしまったので、ここでさらに5000円使うと1万円の支出になり、予定が狂うため。	前売券を買うほど観たかったものだと思うので、5000円払って当日券を買うと思う。
23	5000円を失くしたショックが大きすぎて劇どころではない。	せっかく劇場まで来たのなら観る。

(注) ＜C＞【(1)買わない＋(2)買う】に該当する者の全員分を原文のまま、掲載している。
但し、「上」という記述は、編集の都合で「左」と著者が変更した。

付録F　＜D＞【(1)買わない＋(2)買わない】理由の詳細

	(1)買わない	(2)買わない
1	合計10000円の出費となるし、5000円札をなくしたのは自分の責任。次、同じことをしないためにも自分に厳しくするべきだと思うから。	左で答えた内容と同じ理由に当たるから。
2	我慢することによって失くした5000円をチャラにできるから。	その日は実質、お金を払わないで観れると思っていたのに結局5000円多く出してみることになるから。
3	お金を失くしたショックで観劇しても内容が入ってこないと思うので、また別の日に来ます。	すでに前売券の購入で5000円使っているのでもう5000円出すのは心情的に厳しい。
4	運が悪いなと思って諦める。	どうして失くしたのかを考えながら帰る。
5	5000円札で買おうと思っているので、失くしたと気づいていたら当日券は買わないと思うから。	1万円も出してまで観ようとは思わないから。
6	当初の予定にない出費はできる限り避けるようにしているから。	余計なお金を使う前に前売券を探してみたいから。
7	失くした5000円札が気になってしまい、買う気がなくなってしまうと思うから。	前売券をなくしているから、お金をムダに使ってしまっているので、テンションがガタ落ちしてしまい、劇を観るところではないと思うから。
8	5000円をなくしたと分かった時点で劇を観たいという気分が下がってしまいあまり楽しめない気がするからです。	前売券ならもしかしたら家に忘れた可能性があるから確かめると思うからです。
9	お金を失くしてしまったショックで劇を観る気がおきなくなってしまうから。	1万円を使って観たいと思わなくなるから。
10	もったいないから。多少興味がある程度のものなら買わない。	見つかるかもしれないから。見つからなかった場合は左記と同じ理由で買わない。
11	もう一度お金を払うのがもったいないから。	もう一度払いたくないから。
12	お金がないのに無理して観る必要はないと思うからです。	券を失くした時点で諦める。同じものをまた買おうとは思わない。
13	劇場に興味がないから買いません。	そのまま帰ります。興味がないので買いません。
14	5000円札を失くしてさらに5000円を払うと、1万円も使ったことになってしまいます。絶対に観たいと思う映画でなければ諦めると思います。	探したら近くに落ちている可能性もあるので、探します。それでも見つからなかったら、潔く諦めます。
15	せっかくの機会ですけど、5000円は高いからその映画が5000円以上の価値があれば買うけどあまりそんな価値はないと思います。	左の問題と同じ理由です。
16	5000円がなくなったら自分の間違いだから終わりです。	そんなに高い映画を好きではないんです。
17	5000円を探してからは大丈夫だけど、探す前には総一万円を使うことになるから。	もったいないけど、本当に観たかったのがないなら買いません。
18	当日券のためにとっておいたお金がなくなってしまって、また5000円を払うと損した気持ちになるから。	自己管理ができていなくて、また買うとなると損した気持ちになるから。
19	お金を失くしたため。	左と同じ。
20	5000円札を探しに来た道を戻ると思うので、その日はそれに費やす。	前売券を探しに来た道を戻る。劇はいつでも観られる。
21	元々用意していた資金がなくなったので諦める。	余分な出費は出したくない性格なので、運が悪かったと思い、諦める。
22	お金がもったいないから。	お金がもったいないから。
23	意地でも探す。	意地でも説明して入れてもらう。
24	5000円をなくすということはすごく損なので、劇は諦める。	5000円も出して同じことをしない。
25	劇を観るための5000円だと決めていたので、その分の5000円を失くしてしまったのなら、観ようとは思いません。	前売券を失くしたのなら、もったいないと感じてしまうので買いません。
26	5000円の劇場に1万円の価値はないので買いません。	締め切られる前に帰ります。買いません。
27	劇にあまり興味がない。	探せばあるかもしれないから。
28	他の予定が狂ってしまうから。	左と同じ、他の予定が狂うから。
29	失くして気持ちが落ちているので、再度買わない。	諦めて観ない方向で考える。
30	5000円失くしてしまったので諦めて帰る。	失くしてしまったので諦めて帰る。

（注）＜D＞【(1)買わない＋(2)買わない】に該当する者の全員分を原文のまま、掲載している。
但し、「上」という記述は、編集の都合で「左」と著者が変更した。